

「共和国」（朝鮮民主主義人民共和国）について 1960 年代に私が抱いていたイメージは、次々と抵抗者たちを絞首台に送る南の朴ファッショ政権の暗さと対比的に、朝鮮戦争による破壊から「チョンリマ・千里馬」の速さで社会主義建設を進めるすばらしい国家というものだった。ただしっくりしない気持を持った記憶もある。「共和国」物産展的なものが東京上野のどこかで開かれ、観にいったところが、金日成の白い大きな彫像を赤い絨緞の上に置く特別室様の場所があり、衛兵の制服を着、白手袋をはめた青年が二人、直立不動の姿勢をとっていた。第二次大戦中の天皇崇拜、あるいは新興宗教のカルト的な雰囲気は私は感じた。

その後 80 年代以降『凍土の共和国』（巫紀書房）を初めとして共和国の内情を暴露する書物が次々と刊行され、他方、金日成の神格化も極まって、彼が創始したとされるチェチュ・自主思想（「人民大衆の自主性を実現するための革命思想」92 年憲法 3 条）が「宇宙を貫く原理」であるとか、その思想以外の何ももの知らない（さまざまな思想を知った上でその思想を選択したということでない）のを美德と讃えるような、「共和国」の公的文献を読む中で、私のイメージは変わっていった。ラングーン事件や大韓航空爆破事件がそれに重なる。現在の私の「共和国」認識は、大量餓死と強制収容所（「10 余の政治犯収容所に 15 万人以上の政治犯」『カルメギ 45 号』13 頁 <http://homepage1.nifty.com/northkorea/karume45.htm>）の専制国家というものだ。ソ連が「歴史的巨悪」だったのなら「歴史的矮悪」とでもいうべきか。国家機関としての特殊工作部隊によって、約 70 人に及ぶ日本人拉致事件がおこされたのは、その「悪」の一端にすぎない。1959 年 12 月 14 日に新潟港をその第一船が出発した帰国船によって「共和国」に渡った日本人妻を含む約 10 万人は、実は拉致の第 1 陣だといえるのではないが、その中の相当数が消息不明、あるいは処刑や虐待による死亡である。

ところで、小泉首相が突如「共和国」訪問というかたちで、支持低迷からの離脱を図ろうとしたのはなぜなのだろう。日朝首脳会談は、二正面作戦の世界戦略を断念したアメリカが極東で一時的デタントを作って、イラク攻撃を行おうとする動機に発している（イラクが全面査察受け入れを突如表明したのはその傍証）というのが私の考えである。動機はどれであれ国交回復に向けてのルートがつけられたことはよいと思う。拉致問題は、国交交渉としてやるべきだ。チェチュ思想信奉の日本人がご馳走招待旅行で「共和国」を訪ねるのではなく、国交回復してふつうの人々が「共和国」と日本を自由往来するようになって強制収容所が解体されないということはあるまい。そう願う。

いま懸念されるのは、近年の日本で横行著しい極右思想が拉致事件で一層勢いづき、その排外的思想に日本の庶民が動かされることである。拉致というなら日本帝国主義の徴用による強制連行や慰安婦動員で拉致された 90 万人の朝鮮人たち（うち慰安婦 10 万人余、原爆被爆者も多数）がいたことを忘れてはならない。そのような歴史的文脈の中に今回の拉致事件を置いて、それを相対化する一つの醒めた目が必要だ。

80 年代の後半以降、フィリピン、韓国、台湾、インドネシアとアジア「民主化」過程が進んだ。数十年、政治体制が構造的に変わってないのが、日本と「共和国」だ。今回の日朝首脳会談で糸口をつけられた国交交渉が国交回復に結実し、さらにそのことが両国の一層の「民主化」に展開してゆくことを改めて切願するものである。（2002/09/27）